

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを
探る

今では誰もが知っている世界的楽器メーカー「ヤマハ」。その

ヤマハの創業者である山葉寅楠は、元は輸入品の時計修理工として腕を磨いていた。その後、医療機器の修理工などを経験し、静岡県浜松市の病院で医療機器修理に携わったことがきっかけで、楽器製作の道を進むことになった。明治二十年、たまたま浜松の尋常小学校で購入したオルガンが故障し、どういった大きさなのか定かではないが、手先の器用な山葉にオルガン修理の依頼が来ることとなった。この修理をきっかけに、山葉は自らもオルガン試作に取り組みることになったのである。

明治二十一年には、山葉は試作機を携えて、東京の音楽取調掛を訪れた。当時の音楽取調掛の設立者であった伊澤修二に評価を委ね、改良すべき指導を受けた。西川同様山葉も職人であっ

たため、モノ作りへの執念は深く、瞬く間にオルガンの製品化に至った。製品化に伴い、山葉は伊澤から共益商社の白井練一を紹介された。共益商社は、大手の教科書会社である。また、この白井練一の紹介で、大阪の大手教科書会社の開成館（現三木楽器）の三木佐助を訪ねた。そして、同年九月には共益商社と開成館の出資を受け「合資会社山葉風琴製作所」を浜松に設立したのである。

西川オルガンというオルガンの雄が君臨する中、後発として参入した山葉にとって、ここまでの成功を導いた要因はいったい何であっただろうか。技術的にもブランド的にも劣り、さらには、公認・非公認のオルガンメーカーがひしめく群雄割拠の業界において……。

成功の要因を一言で言うくと、山葉のオルガンの定義付けで

あったと言える。西川がオルガンを教会などでの使用に耐える楽器、海外メーカーに負けない品質と価格として製造販売していたのに対し、山葉はあくまでも学校教育用品「教具」として捉えていたことであると言える。その布石として、出資を仰いだ白井、三木両者の教科書ルートが、教具販売に生きてくる。そのルートを活用することで、学校という顧客は自然と全国に

開拓される。ときあたかも唱歌科目が全国の小学校で開始された時期でもあり、これを取り切った音楽取調掛の伊澤との交流は、山葉にとって追い風になったに違いない。こうしてみると、山葉の卓越した商売の才能、人脈づくりから事業発展の流れを垣間見ることが出来る。それが、西川オルガンの衰退の序曲でもあったのだ。

(株式会社十字屋 倉田恭伸)



▲Mason 社製のベビーオルガン 39 鍵

主にアメリカで 1880 年代に製作された普及オルガン。山葉寅楠が修理したオルガンも Mason 社製オルガンだったと言われている。

※音楽取調掛（おんがくとりしらべかかり）

明治 12 年（1879）に文部省内に設置された音楽教育の研究、音楽教師の育成のための機関。「小学唱歌集」を編集。同 20 年、東京音楽学校（現在の東京芸術大学音楽学部の前身）に改編。

※参考文献

赤井 励 「オルガンの文化史」青弓社
田中 健次 「電子楽器産業論」弘文堂

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを
探る

西川オルガンは、大正時代までは日本一のオルガンメーカーであったことは、今現在でも語り継がれていることである。しかし、西川寅吉は、大正九年（一九二〇年）一月八日に脳溢血で亡くなった。創業者であり日本

におけるオルガン製作の第一人者であった寅吉の死は、西川オルガン消滅と同等の意味を持っていた。その証拠として寅吉の死後わずか一年で西川オルガンは日本楽器製造（現ヤマハ）に売却されたのである。

寅吉には安蔵と、とりという一男一女二人の子供がいた。（一説によると安蔵は養子であったとされる）安蔵は、西川オルガンの跡取りとして英才教育を受けていた。その一例としてアメリカのエステイ社に留学をしてピアノ・オルガンの修行をしていた。また、とりは東京音楽学校に通い音楽の勉強に勤しみ

治二十七年に卒業している。このように寅吉は、西川オルガンの将来を見据え、どちらが跡を継いでも事業が発展する準備を早々にしていたのである。しかし、そんな寅吉の思惑も大きく転換させられるのである。

不運にも娘のとりは明治二十九年に横浜の日ノ出町で亡くなった。また、その後息子の安蔵も当時流行したスペイン風邪で父親よりも先に亡くなってしまったのだ。明治三十三年のことである。子に先立たれた西川の気持ちもさることながら、西川オルガンを継承するべき跡取りがいなくなってしまうのである。二人の死は、寅吉にとって筆舌に尽くしがたい悲しみと落胆であったに違いない。唯一残されたのが、安蔵の妻西川千代であった。

大正八年（一九一九年）に寅吉は引退、社名も合名会社西川

楽器製造所となった。その時に故安蔵の妻である千代が代表社員となって寅吉の後を盛り立てるべく経営に携わることになった。千代は、元は踊りで名を轟かせた人物で、とても華やかであったそうだ。音楽を愛し、西洋音楽や文化の普及に向け努力をしていたといわれている。故安蔵の妻としては最高の人物であったかもしれない。しかし、経営者となると話は別である。

ダンスの普及活動などに力を入れず本業は疎かになっていたのである。千代に経営権が移って二年未滿で西川楽器製造所は終焉してしまったのである。

（株式会社十字屋 倉田恭伸）



▲西川寅吉の写真

弘化三年（1846年）千葉県君津郡周准郡常代村の伊藤徳松の次男として生まれる。大正9年（1920年）脳溢血で死去。享年74

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを
探る

西川オルガンの継承者。本来の意味では買収した日本楽器製造だと思われるかもしれない。しかし、技術的にも音質的にも西川寅吉の技術とセンスを継承したのは、松本新吉であった。

松本新吉は、西川寅吉と同郷で君津市の出身。生まれは一八六五年（慶応元年）農家の長男として生まれた。西川オルガンの業容拡大時期にオルガン技術者として修行を始めたのが一八八七年（明治二〇年）新吉二十二歳の時である。西川オルガンに入る前までは農業を営んでいた。

ではなぜ、西川オルガンに招聘されたのか？そこには親族であったということが、深く関係しているようだ。新吉は、西川寅吉の姪である「るゐ」と結婚していた。仕事は主に農業に従事し、その傍らで左官業もこなしていた。元々手先が器用であっ

たため寅吉のおめがねにかなったのであろうと推察される。さらに、新吉は、寅吉の生家と隣同士であり、古くからの顔なじみでもあったので、お互いの素性や性格もわかった上での採用であったことが想像に難くない。

新吉は、西川オルガンで六年間修行に励んだようだ。技術的な才能はもちろんのこと、音楽的な才能も高く、寅吉の一番弟子として西川オルガンの中で絶対的な地位を築きあげた。その証拠に西川オルガンはこの六年で業容を大きく拡大し、確固たる基盤を築けた時期でもあった。

しかし、一八九三年（明治二六年）に、新吉は西川オルガンを去ることに……。この理由は諸説様々あるが、有力な説として、世襲問題であったようだ。寅吉の息子である安蔵は、当然西川オルガンの承継者であり間違いなく跡を継ぐべき存在で

あった。かたや新吉は、寅吉とは親類関係にあり、西川オルガンで一番の技術者であった。その優秀さが仇となってあらぬ疑いや妬みが横行したことが容易に考えられる。

半ば破門に近い形で新吉は西川オルガンを後にしたのである。しかし、これでへこたれる新吉ではなかった。六年間で身につけた技術を元に松本オルガンを興すことになったのである。そ

して、松本オルガンは、短期間で西川オルガン、日本楽器製造と肩を並べる楽器製造会社へと発展していくのであった。（次号に続く）

（株式会社十字屋 倉田恭伸）



▲関東大震災前後の十字屋

昔の十字屋の写真が出てきたということで拝借した写真です。当社にも記録のないビルの写真がありました。現在調査中ですが、おそらく震災後すぐの仮店舗と思われます。

※参考文献
赤井 励 「オルガンの文化史」 青弓社
ホームページ 君津地方歴史情報館

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

西川オルガンを後にした松本新吉は、東京日本橋で楽器修理店として再スタートした。腕は確かな職人であったため、十字屋創業者の一人である戸田欽堂が開発した紙腔琴を模した紙巧(ママ)琴を手始めに、オルガンの修理・製造をスタートさせていった。後発組の宿命というのか、ブランド力のない松本オルガンは価格での勝負をせざるを得なかったのであるが、ライブルである西川オルガンよりも相

当安い価格でオルガンを販売していたらしく、西川の逆鱗に触れたようでもある。

松本はオルガン製造に関して、すでに規模も知名度もある西川・山葉ブランドが市場を席巻する中、他社があまり携わっていないピアノ製造に注目していた。そこで松本は明治三十三年に渡米する。(元来クリスチャンであった松本は、渡米に際し銀座

教会の協力を得ていたといわれている) 渡米先はニューヨークのピアノ工場で、当時、東洋人として初めての研修生として受け入れられたようだが、人種差別が激しい時代のアメリカへ単身乗り込んだのだから厳しい環境であったことは容易に想像できる。しかし、持ち前の生真面目さと熱意でこの試練を乗り越え、約一年の滞在を経て日本に帰国する。

しかし帰国後すぐに松本に不幸が……。西川寅吉の姪でもある妻「るる」が他界したのだ。深い悲しみを背負いつつ再出発の一步を踏み出さなければならなかった松本だが、それを克服し、大きな変革を遂げていくことになる。

明治三十五年には、ディスク型オルガンの製造販売、翌年には、ようやくアップライト式のベビーピアノの製造販売をスタートさせた。本場仕込みの技術と調律で松本のオルガン、ピアノの評価は高

まり、大阪で開催された第五回内国勧業博覧会では、オルガン三等、ピアノで褒章を得るまでにいたった。

この受賞は、松本ブランドにとつて大きな追い風となり明治三十七年には、投資家の援助を受け「松本楽器合資会社」を設立し、そして銀座には直営店である松本楽器店を構えるまでになった。特にピアノに関しては、その音色の良さで販売も好調に推移したようだ。

順風満帆に思えた事業であったが、またも松本に災難が降りかかることに。(次号に続く)

(株式会社十字屋 倉田恭伸)



◀明治時代の新聞広告。
「粗悪の偽物御要心」と書かれていることから、紙腔琴の模造品が溢れかえっていたことが伺えます。

※参考文献
赤井 勲 「オルガンの文化史」青弓社
ホームページ 君津地方歴史情報館

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを
探る

松本新吉ほど、災難に見舞われた楽器製造者はいなかったのではないか。

苦勞の末、ようやく経営も軌道にのったところで、築地の工場が火災で焼失する。明治三十九年の出来事である。失意に暮れる松本に手を差しのべたのは、後に第七代東京市長となった後藤新平であった。当時の文献をみると後藤は、台湾に民政局長として赴任し帰国したところであつたようだ。なぜ、松本の支援を買ってでたのか、また二人の接点は何であつたかは不明であるのだが、その解を求めると、後藤にはこんなエピソードがあつた。台湾の植民地政策下において、自ら医者であつたという背景からか、学者を尊重し優秀な技術者を重く用いて事にあつていたそうだ。そして台湾での事業を見事成功に導いたのである。この経緯からみても、

日本に帰国した後藤が、国家国民のために優秀な技術者であつた松本をみすみすほっとけなくて、支援を買ってでたのではないかと考へる。

後藤の支援のおかげで、翌明治四十年には、築地対岸の月島に立派な工場を新設することができた松本は、時間を取戻すかのような勢いでピアノ製造に邁進した。この頃が、松本の絶頂期であつたと推測される。年間のピアノ生産台数は百台を超えていたとも言われている。しかし楽器製造に注力するあまり、経営は出資者に任せてしまうこともあり、松本が知らない間に松本楽器合資会社の出資者の名義変更が行われていたのだ。勢いに乗っている時期でもあつたので、特段気にも留めずにそれを容認したようだ。

再建を果たし、勢いに乗つていたこの状況もわずか七年後の大正三年の暮れに一変することに。再

び月島の工場が焼失してしまつたのだ。一度ならず二度目の焼失であつたが、松本はくじけず工場再建に向けた資金集めに奔走した。この工場焼失の混乱期に、名義変更をした出資者に銀座の松本楽器販売店の営業権が移つてしまったことも一筆付け加えておく。

工場と販売店を同時に失つた松本であつたが、焼け跡に小さな三代目の工場を見事再建し、さらに京橋柳町に「松本楽器販売店」を出店した。真面目な松本には支援者も後を絶たなかつたのである。再建も順調に進み、見事に復活を遂げたのである。

二度目の焼失から九年後の大正十二年九月一日、関東大震災が発生。地震による倒壊はなかつたものの、翌日になって飛び火によつて全焼。三度目の火災を味わつたのである。その後、再度再建するが月島工場は長男に譲り、自身は郷里に戻つて小さな工場ピアノ



▲ 関東大震災直後の様子。
この写真は現在のガス灯通り。倒壊した建物と倒壊を免れた建物がありましたが、多くは火災で焼失しました。

を作り続けた。長い受難の時代を乗り越えた松本は、自分の追い求めるピアノを研究し続けることに。松本新吉は昭和十六年に亡くなったが、多くの困難とともに乗り切つてきた子ども達がその意志を継ぎ、国内における音楽文化の普及に貢献している。(次号に続く)

(株式会社十字屋 倉田恭伸)

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを

探る

音楽を聴くスタイルは、時代

とともに大きく変化してきました。今では、インターネット経由で好きな時に、好きな音楽をダウンロードし、携帯電話や専用の端末を使って、いつでもどこでもお気に入りの音楽を楽しむことができるようになりました。また、音楽の楽しみ方も、単に曲を聴くことから、携帯電話の着信音や、メールの着信音など使用用途も広がり、まさに音楽の消費が拡大している瞬間に私たちは、立ち会っているのです。

このように私たちが音楽を気軽に持ち歩けるようになったのは、大きな技術革新があったからです。その始まりは、ちょうど今から百三十年前、一八七七年の四月までさかのぼります。フランスの象徴派詩人でありアマチュア科学者であったシャル

ル・クロによつて「音響現象を録音しかつ再生する方式」についての論文が、パリの科学アカデミーに提出されました。それまでも音の記録の研究はある程度立証されていましたが、肝心の再生させる理論の確立が追いついていなかったのです。それをシャルル・クロによつて理論化されました。

音の記録については、一八五七年にフランスのレオン・スコットが「フォノトグラフ」を發明しています。このフォノトグラフによつて得られた音溝を複写し、それをエッジングすることで表面に凸凹の溝を作り、鉄針でそれを追従しながら再生音を出すという仕組みです。シャルル・クロは、これを「パレオフォン」と名づけた。この技術の開発には、優れた複写の技術が必要でした。彼はカラー写真技術においても造詣が深く、その知識が音の再生の理論

に大きく貢献したのです。

しかし、この研究は先進的過ぎず、結局フランス政府への特許出願という形をとることになりました。この特許内容は、現在の録音方式の原型である横振動やエジソンが用いた縦振動の方式、そして電気抵抗の変化を利用した録音方式の三つを含んでいました。

ところが、またしても彼にはチャンスがありませんでした。この理論を実証する資金や機会を与えられなかったのです。結局この優れた研究は、フランス政府の無関心によつて、エジソンへの栄光を譲る形となってしまったのです。

(次号に続く)

(株式会社十字屋 倉田恭伸)



▲ 明治四十年頃の十字屋。
蓄音機の輸入を始め、国内での販売を始めたときの写真。
多くの蓄音機が並んでいるのが分かる。

(参考文献)

河端茂著 「レコード産業界」 教育社新書